

ナルボンヌの「平和の祭壇」

山本晴樹

現在、フランス南部の都市ナルボンヌの考古博物館に、その正面に《PACI·AVG》の銘をもつ祭壇がある。この祭壇はその銘から明らかなように「アウグストゥスの平和」(Pax Augusti あるいは Pax Augusta)⁽¹⁾に捧げられたものである。従って、ここでは便宜上この祭壇をナルボンヌの「平和の祭壇」と呼ぶことにしたい⁽²⁾。もち論「平和の祭壇」に関しては、首都ローマのものが最も有名かつ重要であり、それとナルボンヌのものは比較すべくもない⁽³⁾。しかし、元首政期の一元老院属州ナルボネンシスの首都におけるローマ皇帝礼拝の成立という問題を考える場合、避けて通れない史料であると思われるので、ここで取り上げてみたい⁽⁴⁾。



写真①

CI.G.RÉVEILLAC CNRS Centre Camille Jullian
MMSH Aix-en-Provence n° 126 126

古代ナルボンヌの研究者であるM. ゲロー (Gayraud) によれば、この祭壇は「ムーア人の塔」(Tour Mauresque) と呼ばれてきた施設が1639年に壊されたとき、その土台のなかから発見されたものである^(4a)。その後考古博物館に移され現在に至っている。

この祭壇は展示室の中央部に置かれ、その浮き彫りの見事さで異彩を放っている。正面には、樅(*quercus*)の円形花冠の真ん中に前述のごとく《PACI·AVG》の銘が彫られている(写真①)。正面下部には、《T·DOMITIVS·ROMVLVS / VOTVM· POSVIT· QVOD / FIDECOMMISSVM PHOEBVM LIBERV / RECEPIT》の碑文が書かれている(CIL XII, 4335)。側面は左右両面とも月桂樹の小枝が描かれており(写真②、写真③)、裏面は、両端の牛頭につながれた樅の飾り紐の浮き彫りが施されている(写真④)。

I

まず碑文を手がかりにこの祭壇をみてみよう。

祭壇正面の中心の碑銘《PACI·AVG》であるが、これは明らかにPax Aug(usti)⁽⁵⁾あるいはPax Aug(ustae)⁽⁶⁾、すなわち「アウグストゥスの平和」を表している。1世紀間にもわたる内乱を最終的に終結させ、平和を回復させたアウグストゥスの偉大な業績⁽⁷⁾に対しては、ローマ世界の各地の人々から絶大な感謝と畏敬が寄せられた。彼が直接滞在したことのあるナルボンヌでもこの「アウグストゥスの平和」に対して奉獻が行われた。

このような奉獻はナルボンヌに限らない。イタリアのローマ近郊の都市プラエネステ(現パレストリーナ)でも、ほぼ同じ頃に「アウグストゥスの平和」に対して祭壇が奉獻されている。正面中央に《PACI·AVG / SACRVM》、下段に《DECVRIONES POPVLVSQVE / COLONIAE PRENESTIN》という銘をもつものがそれである⁽⁸⁾。これらの碑文が示すとおり、「アウグストゥスの平和」に対して植民市プラエネステの都市参事会員および市民団が祭祀(*sacrum*)を行っている。ここでは都市全体によって「アウグストゥスの平和」の祭壇が建立されている。

ナルボンヌの「平和の祭壇」が建立された時期であるが、M. ゲローは、アウグストゥスがガリアに滞在して以降の前26-25年を上限とし、下限をローマで「平和の祭壇」が奉獻される前9年としている⁽⁹⁾。

この祭壇の奉獻者ティトゥス・ドミティウス・ロムルス(T. Domitius Romulus)に関する研究はきわめて限られている。南フランスのエクスにおけるドミティウス家に関する研究をおこなったY. ビュルナン(Burnand)はこの人物をナルボネンシスにおける属州人としてドミティウスを名乗る最初の人物とみなしている⁽¹⁰⁾。家名(*cognomen*)のロムルス(Romulus)に関しては、ナルボンヌではこの碑文で現れているのみである。属州全体でもわずか4例を数えるにすぎない⁽¹¹⁾。これ以上のプロソポグラフィックな追跡は困難である。

《votum posuit.》「誓約されたもの(*votum*)を設置した(*posuit*)」。ここで「誓約されたもの」とはすなわちこの祭壇のことである。その設置場所が問題であるが、祭壇の発見場所はフォーラムの東側に接したところであるので⁽¹²⁾、おそらくフォーラム内であろう。さらにそこでの正確な位置が特定されるべきであるが、フォーラムの発掘自体が困難である現状では、これ以上の探求は

不可能である⁽¹³⁾。

正面下段の碑文《quod fideicommissum Phoebum liberu(m) recepit.》は以下のように理解される。「信託遺贈 (fideicommissum) によって自由人である (liber) フォエブス (Phoebus) を取り戻した (recepit) が故に」。Th. モムゼン (Mommsen) はフォエブスをT. ドミティウス・ロムルスの息子とみなし、彼は信託遺贈によって解放された息子フォエブスを取り戻したと解釈する⁽¹⁴⁾。この遺贈はそもそもアウグストゥスの達成した平和によって可能となったのであろう⁽¹⁵⁾。従って、彼の平和に対してT. ドミティウス・ロムルスはこの祭壇を奉獻するに至ったと思われる。

以上のことから、碑文を字義どおりに解釈すれば、ナルボンヌの「平和の祭壇」は、T. ドミティウス・ロムルスなる者が、「アウグストゥスの平和」によって実現した信託遺贈により解放された息子フォエブスを取り戻したが故に、「アウグストゥスの平和」に対してこの祭壇を奉獻した、ということになる。

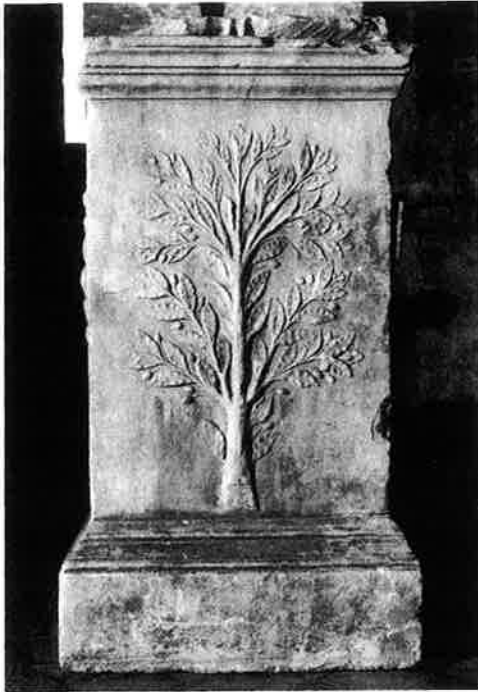
II

次にこの祭壇の図像を検討してみよう。

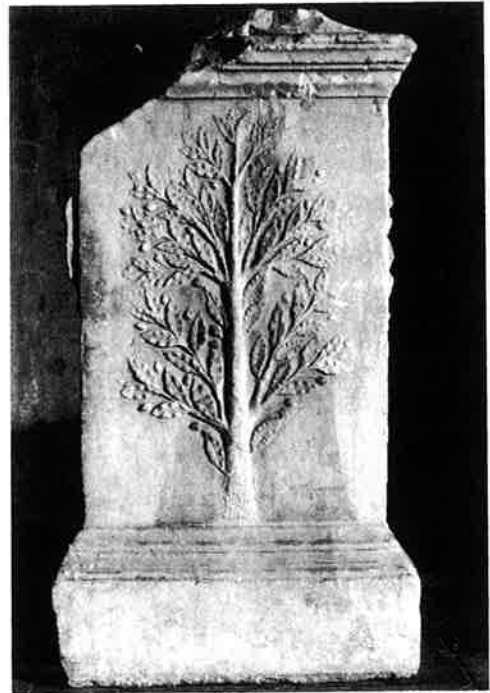
これまで見てきたように祭壇正面には櫛の円形花冠が彫られている (写真①)。この櫛の葉で作られた円形の花冠はアウグストゥスと関連の深いものである⁽¹⁶⁾。というのも、アウグストゥスの『業績録』36⁽¹⁷⁾ に以下の記述がみえるからである (カッコ内は筆者の補足)。

「6度目 (前28年)、および7度目 (前27年) のコンスル職の年に、余はずでに内乱を終結し、万人の合意に基づいて全権を掌握していたが、国家 (res publica) を余の権限 (potestas) から元老院およびローマ国民の裁定 (arbitrium) に委ねた。このような余の功績に対して、余は元老院決議によってアウグストゥスの称号を授かり、我家の門柱は月桂樹によって飾られることが公認され、市民の冠 (corona civica) が我家の戸口の上に付設され、また、黄金の肖像楯 (clupeus aureus) がユリウス議事堂に安置された。元老院およびローマ国民がこれを余に与えたのは、余の勇氣 (virtus)、慈愛 (clementia)、正義 (iustitia)、敬虔 (pietas) を称えるためであり、このことは、その肖像楯の碑銘によって明らかである。これ以後、余は権威 (auctoritas) において万人に優越していることがあっても、権力 (potestas) に関しては、余と共に公職にある同僚達より卓越したなものをも、保持することはない。」

このなかでアウグストゥスの屋敷の戸口の上に置かれた「市民の冠」(corona civica) は「市民の救済者」のために与えられる冠であり、櫛の葉で作られていた。またユリウス議事堂に安置された黄金の肖像楯は円形のものであった⁽¹⁸⁾。それ故、ナルボンヌの「平和の祭壇」正面の櫛の円形花冠は『業績録』に描かれた櫛の市民の冠と黄金の肖像楯を図像化したものであり、明らかにアウグストゥスを象徴したものである⁽¹⁹⁾。



写真②
C.I.G.RÉVEILLAC CNRS Centre Camille Jullian
MMSH Aix-en-Provence n° 126 127



写真③
C.I.G.RÉVEILLAC CNRS Centre Camille Jullian
MMSH Aix-en-Provence n° 126 129

次に右側面(写真②)および左側面(写真③)はそれぞれ月桂樹の小枝が描かれている。『業績録』のなかでは、ローマ世界に平和をもたらしたアウグストゥスの功績を称えて彼の家の門柱に月桂樹が飾られていた。従って「アウグストゥスの平和」に捧げられたナルボンヌの祭壇でもこの月桂樹が描かれたものと思われる。さらに月桂樹はアポロンの聖木であり、アウグストゥスがとりわけアポロンを信奉したことは広く知られていたため、この祭壇の左右側面に配されたのであろう。

二つの月桂樹とアポロンとのつながりを示す図像としてアルルの「アポロンの祭壇」がある。ここでは祭壇の側面ではないが、正面の三分割面の中央にアポロン坐像があり、その左右に月桂樹の小枝の浮き彫りが施されている⁽²⁰⁾。

「ナルボンヌの祭壇」の裏面には二頭の牛頭に繋がれた櫛の飾り紐が描かれている(写真④)。



写真④
C.I.G.RÉVEILLAC CNRS Centre Camille Jullian
MMSH Aix-en-Provence n° 126 128

先に見たように、同じく「アウグストゥスの平和」に捧げられたプラエネステの祭壇では正面にこの図像が描かれている⁽²¹⁾。またM. ゲローによれば、隣接する属州タラコネンシスの首都のタラコ(現タラゴーナ)では、前26-25年に建てられた皇帝礼拝の祭壇に、同じ櫛の飾り紐の図像が見られる⁽²²⁾。D. フィッシュウィックも同じ図像をガリア内陸部の属州ルグドゥネンシスの首都ルグドゥム(現リヨン)で、前12年に「ローマとアウグストゥス」に捧げられた祭壇をとり囲む壁にみている⁽²³⁾。

これらの事例は、櫛の飾り紐の図像がアウグストゥスに対する礼拝と密接な関係があることを示すものであろう。E. ドゥムジョーが、ナルボンヌの「平和の祭壇」をこの地における皇帝礼拝の端緒としたのは、適切な指摘であると言わなければならない。

III

これまで、ナルボンヌの「平和の祭壇」について、それに施された碑文と図像を手がかりに見てきたわけであるが、このことからどのようなことが言えるのであろうか。ここでは図像からわれわれが得たものを踏まえて碑文をあらためて検討してみたい。

この祭壇は上述のように、字義どおりに解釈すれば、T. ドミティウス・ロムルスなる者が「アウグストゥスの平和」に対して奉献をおこなった、ということになるのであるが、この人物を単なる一個人としてのみ解釈はできないように思われる。というのも、同時期につくられたアウグストゥスに捧げられたいくつかの記念碑をみると、ほとんどがその建設は公的な組織が関わっているからである。一個人が奉献している例は極めて稀であるといわなければならない。その意味でナルボンヌの「平和の祭壇」はきわめて異例である。従ってここには従来の解釈とは異なる別な解釈の可能性も考えられるのではなかろうか。

それで、まず左右の側面をみると、月桂樹の小枝の図像は、アルルの「アポロンの祭壇」の例から見てもわかるとおり、明らかにアポロンを象徴している^(23a)。とすると、ナルボンヌの「平和の祭壇」正面の碑文に現れる《PHOEBVS》は人名であるとともにアポロンを暗示するものではなかろうか⁽²⁴⁾。

次に、この祭壇の奉献者である T. ドミティウス・ロムルスという名前もまた一個人の名前以上の何らかの意味を暗示するものとして見直される必要があるだろう。とすると、家名(cognomen)の《ROMVLVS》はもちろんローマ初代の王の名前であるが、ここではむしろ「ロムルスの再来」としてのアウグストゥスを暗示するのであろう⁽²⁵⁾。

氏族名(nomen)の「ドミティウス」もわれわれに連想させるものがある。それは、この都市ナルボンヌおよび属州ナルボネンシスの建設者 Cn. ドミティウス・アヘノバルプスの名前である。彼はナルボネンシスの街道(via Domitia)にも名前を残しているように、この属州においてきわめて親しみのある名前である。したがってここでは、ドミティウスという名前に「都市および属州の

建設者」のイメージが重ねられているのではなからうか。

こうしてみると、祭壇の奉献者である T. ドミティウス・ロムルスは、一個人の名前である以上に、その中に新しい時代の都市および属州の建設者アウグストゥスのイメージが含まれている印象を強くうける。そして、それにつづく「信託遺贈云々」の文章も、実子フォエブスの取り戻しということ以上に、アポロン (=フォエブス) 信仰にかかわるものとして理解されることができるとはなからうか⁽²⁶⁾。

そうであるとすれば、ナルボンヌの「平和の祭壇」は、一個人が「アウグストゥスの平和」に奉献した祭壇という形をとりながら、内実はアポロン信仰という宗教的礼拝をとおして、公的なアウグストゥス礼拝を成立させようとする意図がこめられているように思われる。この祭壇で重要な図像である二つの月桂樹の小枝の意味するものを、幅広い史料に基づきながら考察したA.アルフェルディも、アウグストゥスによる一連のカモフラージュという手法が、「貴族共和政から神的な支配体制への不可避的な移行を確実なものにすることができた」⁽²⁷⁾としているところをみると、われわれの推論もあながち的はずれなものではないように思われる。

註

- (1) Pax Augusti あるいは Pax Augusta については後述。
- (2) M. Provost (ed.), *Carte Archéologique de Narbonnaise II / 1 (Narbonne et le Narbonnais)*, Paris, 2002, p.431では、「祭壇」ではなく、その上に彫像等が置かれる「台座」とされている。なるほど仔細にこの祭壇の天辺をみると、平面ではなく、中央部分が四角に掘り込まれており、その底辺表面は荒削りされている。明らかになんらかの受け口になっており、この上に彫像等が置かれた可能性も否定できないが、ここでは従来どおり「祭壇」としておく。
- (3) ローマの「平和の祭壇」は前13年アウグストゥスのヒスパニアおよびガリアからのローマへの帰還を祝して建立された。詳細は以下を参照。広瀬三矢子「「アーラ=パーキス=アウグスタエ」について—アウグストゥスの統治政策との関連において—」『西洋史学』CXLII (1986年) 35-51頁。
- (4) ナルボネンシスにおけるローマ皇帝礼拝の研究者であるE. ドゥムジョー (Demougeot) は、この祭壇をその嚆矢とみなしている。Cf. E. Demougeot, *Rémarques sur les débuts du culte impérial en Narbonnaise, Provence Historique*, LXXI (1968), p. 39-65, p. 53.
- (4a) M. Gayraud, *Narbonne antique des origins à la fin du IIIe siècle*, Paris, 1981, p.356. おそらくこの祭壇は塔建設の際、再利用されたものと思われる。従って祭壇本来の場所は発見地とは異なることが考えられる。
- (5) E. Demougeot, *op. cit.*, p. 53; M. Gayraud, *op. cit.*, p.356; D. et Y. Roman, *Histoire de la*

- Gaule*, Paris, 1997, p. 541.
- (6) Y. Burnand, *Domitii Aquenses: Une famille de chevaliers romains de la région d'Aix-en-Provence. mausolée et domaine*, Paris, 1975, p. 222 n.114; *CAN II/1*, p. 431.
- (7) アウグストゥス自身も『業績録』13で以下のように自己の達成した平和の意義を述べている。「われわれの先祖は、ローマ国民の全統治領にわたって陸と海に、勝利の結果平和がもたらされたときはいつでも、ヤヌス・クィリヌスの神殿の扉を閉じることを命じていた。記録によると、このヤヌスの扉は、私の生まれる以前、都市国家創建以来、ただ二度しか閉じられなかったというのに、わたしが元首の間、元老院は三度閉じることを命じた。」(スエトニウス、国原吉之助訳『ローマ皇帝伝』岩波文庫214頁)。
- (8) *CIL XIV*, 2898.この祭壇の図版は以下を参照。St. Weinstock, *Pax and the 'Ara Pacis'*, *JRS* 50 (1960), p. 55. それによれば、祭壇正面には二頭の牛頭につながれた櫛の飾り紐(ナルボンヌの「平和の祭壇」の裏面のモチーフ)のレリーフのなかに《PACI·AVGVST / SACRVM》の銘が刻まれている。残念なことに、この図版では側面、裏面のレリーフが参照できない。正面以外の図像も合わせ見ることによって、ナルボンヌの祭壇との総合的な比較検討が可能になると思われる。
- (9) M. Gayraud, *op. cit.*, p. 356 n. 289.なお*CIL XII*, 4335 でO.ヒルシュフェルト(Hirschfeld)は時期を後1世紀初頭としているが、ここではゲローの年代の方を取る。
- (10) Yves Burnand, *op. cit.*, p. 222.さらにビュルナンは、ナルボンヌにおけるドミティウスを名乗る者を分析して、この都市では二つのドミティウス家系(すなわちLucii Domitii と Titii Domitii)を検出している(p.219)。なおE.ドゥムジョー(*op. cit.* p. 53)、M.ゲロー(*op. cit.*, p. 356)およびロマン夫妻(*op. cit.*, p. 541)はこの人物の氏族名(nomen)をディディウス(Didius)としているが、この読み方の根拠は不明である。
- (11) *CIL XII*, 2604; 3350; 4335; 5686,752.
- (12) M. Provois (ed.), *Carte Archéologique de la Gaule II/1* (Paris, 2002), p.431(226番)および巻末付図参照。
- (13) ナルボンヌのフォルムに接する神殿の貴重な発掘報告については以下を参照。V. Perret, *Le Capitole de Narbonne*, *Gallia* 14 (1956), p. 1-22.
- (14) *CIL XII*, 4333 の註参照。
- (15) 船田亨二氏によれば、信託遺贈の制度はアウグストゥスによって制度的に安定したものになったという。同氏『ローマ法』第4巻(岩波書店1971年)422頁参照。
- (16) St. Weinstock, *op. cit.*, p. 54.
- (17) 古山正人他編訳『西洋古代史料集(第2版)』東京大学出版会2002年181-182頁。Cf. Augustus, *Res Gestae Tatenbericht (Monumentum Ancyranum)*, Reclam Stuttgart, 1975.

- (18) 黄金ではないが大理石で作られた円形の盾が、ナルボンヌの「平和の祭壇」と同時期にア
ルルで奉獻されている。その図版はD. Fishwick, *op. cit.*, I/1, Pl. VIII.を参照。毛利晶氏に
よれば、この肖像楯はローマ世界各地で模倣されたという。同氏「「ベルヴェデーレの祭
壇」に関する覚書『西洋史学』CLV (1989年) 37頁。
- (19) 高津春繁氏 (『ギリシア・ローマ神話辞典』岩波書店 1960年 293頁) によれば檜の木はロ
ーマの最高神ユピテルの聖木でもあるので、ユピテルの加護も意味されているのであろう。
- (20) Cf. L.-A. Constans, *Arles*, Paris 1928, p. 72 (Pl. XI, 3); *Lexicon Iconographicum
Mythologiae Classicae (LIMC)* II/2 (1984) p. 352 Pl. Apollo 587.なお毛利晶氏は、A.
アルフェルディー (Alföldi) の研究によりながら、月桂樹を「アウグストゥスの地位と威
信、特にその *numen* (神的な力) を象徴する」ものとしている。同氏、前掲論文、37頁、
註2参照。A.アルフェルディーの研究の概要については以下を参照。A. Alföldi, *Die Zwei
Lorbeerbäume des Augustus*, in A. Wlosok (hrsg.), *Römischer Kaiserkult*,
Darmstadt, 1978, SS.403-422.
- (21) 註(8)参照。
- (22) M. Gayraud, *op. cit.*, p.356. Cf. R. Etienne, *op. cit.*, p. 368- 369; D. Fishwick, *op. cit.*,
p. 172. エティエンヌは、このレリーフの描く半円形を『業績録』のなかに見える肖像楯
(*Clupeus Virtutis*) の円形を模したものとみなしている。当該図像の図版はエティエンヌ
前掲書の巻末図版 (Pl. III) を参照。
- (23) .D. Fishwick, *op. cit.*, I, 1, p.106. Pls. VI b, VII.
- (23a) 註(20)参照
- (24) Phoebus はアポロンの別称である。高津春繁『ギリシア・ローマ神話辞典』261頁。
- (25) 前27年にオクタウィアヌスが元老院から「アウグストゥス」の称号を付与されるに先立っ
て「ロムルス」の称号も検討された。Cf. art. “Augustus, Augusta” in *Oxford Classical
Dictionary* (2n ed.).
- (26) 現在のところ、この箇所の暗喩をどう説明すべきか考えあぐねているところである。推論
にしかすぎないが、もし仮にこの「祭壇」が、先にあげたCAN II/1 (p. 431) が言うよう
に「台座」であるとするならば、この箇所の暗喩はこの「台座」の上に置かれたであろう
もの(彫像等)と関連して考察されるべきかもしれない。
- (27) A. Alföldi, *op. cit.*, S. 422.

[付記] ナルボンヌの「平和の祭壇」の写真に関しては、南仏エクスのカミーユ・ジュリアンセ
ンターの協力を得た。この場を借りて同センターに感謝の意を表したい。

Autel à la Paix Auguste de Narbonne

On dit que l'autel à la Paix Auguste de Narbonne est construit par un individu nommé T. Domitius Romulus. Mais, en analysant les inscriptions et les iconographies de cet autel, il me semble qu'il est aussi construit semi-officiellement, parce que, à propos des iconographies, une couronne de chêne, une guirlandes de feuilles de chêne, et deux rameaux de laurier symbolisent clairement un culte à Auguste qui croit en dieu Apollon. Ensuite, à propos des inscriptions, le *nomen* de "Domitius" et le *cognomen* de "Romulus" suggèrent Auguste en tant que fondateur de la ville et de la *provincia*. Et le nom de "Phoebus" signifie, semble-t-il, dieu Apollon plutôt qu'un individu. Donc cet autel camoufle la formation du culte impérial par l'intermédiaire du culte à dieu Apollon, comme A. Alföldi nous indique dans son livre sur le sujet de deux rameaux de laurier.

YAMAMOTO Haruki

Université de Beppu (Japon)

* Je suis très reconnaissant au CNRS Centre Camille-Jullian des photos d'Autel à la Paix Auguste de Narbonne.